幻の名曲50年ぶり演奏

幻の名曲演奏を前に、総仕上げをする神戸大学交響楽団＝神戸市灘区の神戸大学学生会館で

グラズノフの交響曲第5番

米から楽譜取り寄せ

神戸大団員ら普及へ意欲

29日晴れ舞台

ロシアの作曲家、アレキサンドル・グラズノフ（一八六五―一九三六）の交響曲第五番が、日本では五十年ぶりに、二十九日午後六時から神戸市中央区の神戸文化ホールで開かれる神戸大学交響楽団（十河真司団長）のサマー・コンサートで演奏される。昭和九年、現在のNHK交響楽団の前身にあたる新交響楽団が東京で初演して以来、演奏されたことがなかった。アメリカから楽譜を取り寄せ、練習を続けてきた学生オーケストラは「幻の名曲を広めるいい機会」と、若者らしい意欲に燃えている。

グラズノフは交響曲を九曲（第九番は未完成）残しているが、なかでも第五番は傑作といわれる。昭和九年の新交響楽団による日本初演は、グラズノフの弟子であり、当時、神戸に住んでいたエマニエル・メッテルが指揮した。しかし、その後は指揮者に恵まれず、また楽譜も外国版しかなくて入手しにくかったことなどから、演奏される機会がなかった。

去年五月、ビクター音楽産業（東京）から、モスクワ放送交響楽団の演奏を録音した「グラズノフ交響曲第五番」が出版され、再評価の機運が高まった。たまたま、このレコードを聴いた神戸大学交響楽団のメンバーたちは「雄大で明朗、そして力強い」と、恒例のサマー・コンサートで演奏することにした。楽譜はアメリカから送ってもらった。同交響楽団は大正四年、神戸高商のワグネル・ソサエティとして結成され、来年は七十周年。学生オーケストラとしては慶応、九州大に次ぐ伝統を誇る。

朝比奈隆・大阪フィルハーモニー交響楽団常任指揮者の話

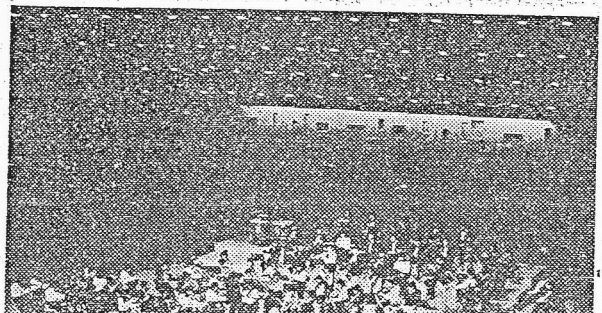
日本初演の時、私はメッテル先生の助手をしていたので、練習にも立ち会った思い出深い曲です。グラズノフについては、大フィルでも今年一月、第八番を日本で初演した。メッテル先生ゆかりの神戸の学生たちが、半世紀ぶりに第五番をやってくれるとはうれしい限りです。

アレキサンドル・グラズノフ　ペテルブルグ生まれ。若くして作曲した第一交響曲はロシア音楽史上、画期的とたたえられた。交響曲九曲のほか、交響詩「ステンカ・ラージン」、バレエ曲「四季」など、多数の作品を発表。ペテルブルグ音楽院の総長をつとめた。革命後の一九二八年、祖国を去り、フランスやアメリカで演奏活動をした。交響曲、協奏曲などはドイツ音楽の伝統に近いため、「ロシアのブラームス」とも呼ばれる。

1984（昭和59年）
6月25日　月曜日
朝日新聞　夕刊

フェスティバルホールで行われ、手塚幸紀指揮の大阪フィルとチャイコフスキー「バイオリン協奏曲」、ハチャトリアン「バイオリン協奏曲」を協演する。入場料は三千、二千五百円。

「〝弦〟の放送のおかげで新しいファンも増え、演奏会や講演も増えてきました」



来年、創立70周年を迎える神戸大学交響楽団

神戸大学交響楽団がコンサート

6月29日

「神戸大学交響楽団が六月二十九日午後六時半から神戸文化ホールで「サマー・コンサート」を開く。同楽団は慶応大、九州大に続き大正四年「ワグネル・ソサエティー」という名称で結成された全国で三番目に古い伝統を誇る学生オーケストラとして知られ、来年で創立七十周年を迎えるという。

当日のプログラムはグラズノフ「交響曲5番」ベートーベン「交響曲8番」ヨハン・シュトラウス「喜歌劇〝こうもり〟」序曲の三曲で指揮は守山俊吾、野村秀彦。

なかでもグラズノフ「交響曲5番」は昭和九年一月、東京での新交響楽団（現NHK交響楽団）定期演奏会で日本初演、されて以来、埋もれていた曲で、レコードもほとんど出ていない。今回五十年ぶりに、しかも学生オーケストラの手で日の目を見ることになり、音楽関係者の注目を集めている。入場料五百円。

グラズノフ「交響曲5番」
50年ぶり関西で初演